



102

# 極地

日本極地研究振興会

第52巻第1号 / 平成28年 3月発行

# 極地 102

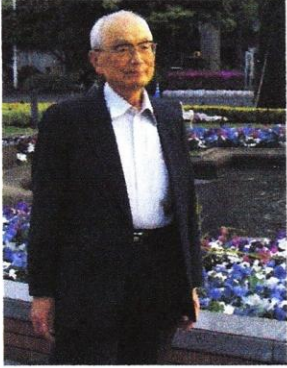
第 52 卷第 1 号

平成 28 年 3 月

別 刷

日本極地研究振興会

## 「極地」の転換点を迎えて



吉田 栄夫

(公益財団法人日本極地  
研究振興会)

日本極地研究振興会は2014年12月8日創立五十周年の日を迎え、1965年8月第1号を発行した会誌「極地」も、2015年4月100号の発行に至り、そこに筆者は拙稿「日本極地研究振興会の50年」を寄稿し、その文末で「新たな発展に向けての課題」に触れた。幸いなことに小規模な陣容ながら強力なスタッフを得て、2015年8月、新天地立川で、新たな第一歩を踏み出すことができた。「極地」も、近年の様々な情報伝達が行われる中でいかなる形をとるか、編集にご協力を頂ける方々の拡大や、編集会議の在り方の再検討などで、新たな姿となるであろう。102号が従来方式の最後となるのを機に、「極地」を少しく振り返ってみることにしたい。

「極地」はこれまで一貫して表紙と裏表紙に、毎号異なる黒白モノクロームの写真を用いてきた。例えば第1号の表紙は海氷上を大陸へと向かう小型雪上車と荷物を積んだ橇、裏表紙はやまと山脈中部の山塊からの展望、第92号は北極点近くのなつの海氷と、南極リュツォ・ホルム湾中央に長く伸びた白瀬氷河の浮氷舌先端と、その流動で変形してゆく海氷など、おおくの方々のご協力による極地の自然や観測活動の貴重な映像も少なくない。

記事については、何回かに分けて重ねられ、これらをまとめた101号総目次で知ることができるが、「極地90号」まで担当された当時常務理事の鈴木 康氏が主として考案された、ユニークな記事の分類に従った表の形をとっている。巻頭言には、学のみならず政、財、官の識者から寄せられた南極・北極への想いが語られた。観測船が「ふじ」になった第7次以降現在まで続く各南極観測隊の隊編成を含む観測計画の概要は、関係者以外には容易に知ることのできない記録である。参加した隊員個人の体験的な報告、諸外国の南極観測の様子やそれに参加した日本人の記録、極地をめぐる科学的、あるいは政治的な国際会議の記録なども貴重なものであった。初期の頃でもかなりの北極圏に関するテーマが取り上げられた。財団の維持会員・賛助会員の半数余りの方々が、極地観測に直接関係しない、日本極地研究振興会の支援者であることもあり、一般の人達、高校生でも理解できるようにとの編集方針で、研究論文ではない研究紹介も少なくない。例えば、19号には島 誠氏による「やまと隕石(南極産)」があり、我が国が第10次越冬観測で初めて発見した9個(外国でそれまでに採集され、公表されているのは4個)の隕石について、その研究や命名などが平易に記述され、これは当時の様子を知る興味深い報文の一つと言えよう。

編集会議での委員の提案によるテーマ選定や執筆依頼により、様々な話題が取り上げられ、他方、観測隊による観測計画や極地ニュースなど、定常的に掲載してきた事項と併せて、これまでほかにない極地情報誌として、一定の役割は果たしてきたと言えよう。

# 極地 LII-1, 2016, No. 102

頁  
(Page)

目次	Contents
巻頭言	Commentary
「極地」の転換点を迎えて／吉田栄夫	1 Y. Yoshida/Recollection at the turning point of "Polar News" editing
記事	Articles
内陸基地の再開に向けて／石沢賢二	3 K. Ishizawa/Road to re-construction of Antarctic inland station of Japan
2015年アルゼンチン隊「南極芸術プログラム」に参加して／月風かおり	13 K. Tsukikaze/Participation in "Art Performance in Antarctica" Program of Argentine Expedition, 2015
帆船・犬ゾリ・複葉機の南極探検 —英国グレナムランド探検1934-37の意義— ／岩田修二	21 S. Iwata/"Sothern Light" ;Formal Report of British Graham Land Expedition in 1934/37 -Its outline and significance in view of the present day
砕氷船アラオンでの韓国・ジャンボゴ基地探訪 —西南極テラノバ湾周辺の最新トピックス— ／金尾政紀	39 M. Kanao/Visit to Korean station Janbogo at Terra Nova Bay in Ross Sea, on board Korean icebreaker Aragon
第57次南極地域観測隊の計画概要／門倉 昭	51 A. Kadokura/The plan of the 57 <sup>th</sup> JARE in 2015-2017
明治天皇と白瀬隊の1stペンギン ～一羽のペンギンの剥製が私達を連れ出した “終わり無き謎解きへの旅”～／大島ひとみ	69 H. Oshima/Search for the stuffed penguin specimen dedicated to Meiji Emperor for the first time by Shirase Expedition
カラフト犬ホセと暮らした南極の日々 ／五味貞介	91 S. Gomi/Old days with Sakhalin-dog "Hose" at Syowa Station, Antarctica
極地ニュース／石沢賢二・神田啓史	94 K. Ishizawa and H. Kanda/Polar News
観測隊略史／村山治太	100 H. Murayama/Summary of JARE activities from the first to 57 <sup>th</sup> Expedition
情報	Information
2015南極越冬基地／石沢賢二	108 K. Ishizawa/Wintering over (Year- round) Antarctic Stations in 2015
(公財)日本極地研究振興会研究・教育助成金のご案内／事務局	38 Secretariat/Guidance to application for the Association "Grant-in-aid"

表紙：アデリーペンギン，リュツォ・ホルム湾岸の露岩で

Front cover : Adélie penguins in an ice-free area on the east coast of Lützow-Holm Bay

裏表紙：白瀬氷河左岸大陸上のヌナタク（孤立峰）ボツンヌーテン

Back cover : Botunnuten nunatak near the head of Lützow-Holm Bay

# 2015年アルゼンチン隊「南極芸術プログラム」に参加して

月 風 かおり

(風書家)

## 「風が吹いている～」

2015年1月26日、私は南極半島の突端にある広大な氷河に立ち、ホープ湾に吹き下ろす「南極の風」を掴んだ。

天候が不安定な南極大陸で活動が出来る時間は限られている。揮毫道具と強風対策に海岸で集めた石ころを軍の雪上車で運び上げ、宿願のインスタレーションに挑んだ。

まず「サークル」、自分の足をコンパスにして氷河に巨大な円を描く。

そして「風道開」(風の道を開く)の文字を雪原に引いた布に墨で揮毫。

絶域の風は「さあ、やれるだけの事をなさい」と言ってまたしても私を試す。おごそかに、潔く、日本人の心意気を刻む。

「サークル」では一時ホワイトアウトになる。そして、私は南極の白い氷の一つになった。

## 世界の極地と「風書」

私にとって、南極は遠い地球の果ての地だった。そんな極地到達にかすかな希望を抱くようになったのは、日本を飛び出して、北米大陸横断、アラスカ半島縦断、第三の極地と呼ばれるサハラ砂漠往復縦断を終えた頃からだった。

私は普段、会社員である。百貨店のバックヤードで毛筆筆耕を仕事にしている。その反面、端正な仕事とは別に、地球を旅して墨で描くという活動を始めたきっかけは、幼いころの台風による自宅半壊の体験からである。形のない「風」という自然が私の心に最初に強烈な驚異と興味を与えたのであった。

旅する時の圧倒的な大陸感、不毛、荒野、秘境からダイレクトに伝わる地球のエネルギーに魅せられ、その地に吹く風が創りだ



写真 1. 「サークル」



写真 2. 「風道開」揮毫

す壮大な風景や逞しく生きる人々を墨の潔さで描きたいと思ったのだ。その活動を『風書』と名付けライフワークにしている。極地への切望はそんな自然体験をした私の当然の流れであった。その最後の辺境が南極ではないか。

### 南極への誘い

そんな私が定期購読しているアウトドア雑誌で「南極通信」を見つけたのが2008年春のことだった。当時、モンベル(montbell)の社員でありながら、女性科学者として2度の越冬を果しておられた岩野祥子さんのレポートだった。

「女性で南極に2度も行っている人がいるんだ」…会いたい。彼女は今でも当時の事を振り返ると、その日の私の言葉を真面目に繰り返してくれる。「どうしたら南極に行けますか？」初対面で、大変驚かれたことと思ったが、岩野氏は穏やかで、きちんと話される方だった。そして私にこう誘った。「そんなに南極に行きたいなら、8月に長野で南極子供スクールがあるから、来ませんか？」私の南極行きのスタートは正にこの瞬間だった。

2008年、信濃毎日新聞が企画した講演会に岩野氏と同じく講師として出席されていた方が、当時国立極地研究所の副所長であった本吉洋一先生であった。子供に交じって、しかも最前列で目を丸くして聞いている妙な着物の女性はさぞかし怪しかったに違いない。子供向けに実験を交えた南極の氷の話、気象の話、隕石の話は私には大変分かりやすく楽しかった。観測や研究、今や南極は地球の窓と位置付けられるサイエンスのフィールドである。このような科学者の領域に私が行けるはずもない。でも、この白く広大で誰もいない過酷な大陸は何と魅力的なのだろう。ああ、そしてなんて

遠い場所。

この出逢いをきっかけに私は、南極とはどんな場所か、そしてそこで日本人が何をやっているのか急がず学んでいこう、と思うことにした。その後岩野氏は日本隊OGとして海上自衛隊「しらせ」の見送り、「しらせ」5002や5003の見学、横須賀港までの試乗、講演会などに誘ってくださった。そこでは多くの南極関係者にお会いする事が出来た。

私が思いも寄らない場所へ出向くことになったのは2010年9月のことだった。極地研のサイトで見つけた南極観測における「公開利用研究のテーマ」を提案する募集に応募し、第4回「南極観測シンポジウム」に参加させていただく機会を得たのである。

当時シンポジウムを担当されていた極地研の神山孝吉先生に私は参加嘆願のメールを書いた。そのお返事というものは、大変温かく懐の深い内容だった。先生はきちんと公開研究の対象者は大学等の研究者と説明しながら、最後に次のようなお言葉を書いて下さった。

「色々なニーズを探る、また南極の場を国民が身近に感じるような環境を提供することも、幅広い視点をもつ市民社会構築の一翼を担えるのではないか、しかしながら研究者と同一の口頭発表でない可能性もあるので、それでも良ければ再度連絡をください。」というものだった。

こうして私は、科学の研究者が集まる会場の一角で、極地でしか生まれえない芸術の意義を伝えるポスター発表をすることが出来たのだ。一人異分野で緊張したが、多くの先生方がお声をかけてくださった。同じ人間として極地を目指す目的がある人々の熱い闘志のようなものを感じる爽やかな時間であった。

## 南極への旅の実現に向けて

その後チベットや南米へ風書の旅をしながら展覧会を繰り返し、その間を縫って、南極や極地関係者への訪問を続けた。観測隊員を多く輩出している北海道陸別町の元隊員の方々、元海上自衛隊の乗組員菅原茂氏、夏隊に参加された飛鳥建設の橋本斉氏、オーロラ研究の第一人者である上出洋介先生ほか沢山の方々のお話は、私の南極への夢を更に膨らませてくださった。そればかりではない。自分の専門性を確実に明確にする必要性を教えてくれた。私の「テーマは何か」だ。私が南極で活動することでどんな役に立つのかだ。

岩野氏に出逢って6年が過ぎた2014年8月、私に一本のメールが届いた。それは二年に一度開催されている国際南極会議（当時ニュージーランド）に出席しておられた極地研の本吉洋一先生からだ。それは「会議で興味深いポスターを見つけた。アルゼンチンが自国のみならず他の国の芸術家も南極へ送り込んでいるプログラムがある」という内容だった。私は驚いた。先生は現場で担当者に会い、後日資料を送ってもらうよう依頼してくださったのだ。アルゼンチン外務省南極局から資料が届いたのはそれから一か月後だった。プログラムのポスターは南極の雪氷上で氷の一部に扮したパフォーマーが造形美を創りだしているもの、白と青の世界に原色の色を繰り返し広げた巨大なメッセージ、何と壮大で自由なパフォーマンスなのだろう。

## アルゼンチン・アートレジデンスに挑戦

「これだ！」アートレジデンスとは、一定の期間芸術家を滞在させてそこで芸術活動を行うプログラムだ。アルゼンチンは何とこのプログラムを始めて10年にもなる

という。2015年のアートレジデンスへの締め切りは10月1日。間に合わないかもしれない。

しかし、私は挑戦を決意した。プロフィール、過去の活動と創作作品、応募動機、現地での活動内容、協力機関等を英文で作成。書類審査のためフォーマットを送った。しかし、9月30日、担当者から活動後の自国開催の協力機関（展示場所）が希望場所でないため書類に不備がある、日本ででの開催会場は世田谷美術館が望ましい。とのメールが返ってきた締め切り日は明日。しかし、世田谷美術館の区民ギャラリーの来年の抽選日は10月19日。絶望的だ。諦めて次年応募に切り替えるか。しかし、これまでがそうであったように、ダメで元々と言う気持ちで、担当者にメールを書き、19日の抽選日まで待ってもらうように嘆願してみた。

その答えは、「待ちます」、とのことで、抽選の可否は神のみぞ知る状況になった。しかも2月に帰国し、作品を書きあげ、準備できる最長時間の9月に当たらなくては意味がない。10月19日、倍率が高い世田谷区民ギャラリーの抽選日、当たった人、希望期間に当たらなかった人が次々と帰って行く。私は運命に委ねた。結果なんと、希望期間の9月9日からの展示期間に当選。これ程嬉しかったことはなかった。早速、アルゼンチン南極局へ連絡、所定のフォーマットを完成させ、後は連絡を待った。こうして遂に、2014年11月18日、アルゼンチン本国からの連絡より先に、本吉先生から2015年のレジデンス参加者公式発表のポスターと共に「おめでとうございます！」とメールを頂いたのだった。

## 南極へ飛ぶ

「ゴォ————。」軍の輸送機 C130 ヘラ

クレスは水平飛行に入った。携帯必需品に入っていた耳栓を装着するように命令が下る。離陸に興奮していた人々が一様に安定飛行に入って静かになる。私は安堵の気持ちと同時に、南極出発までの数年間の出来事が、走馬灯のように蘇って止まなかった。2015年1月3日16時半、南極へ向けて一路、ブエノスアイレス郊外にある、エル・パロマル空軍基地から同国南端のリオ・ガジェゴス基地へ向けて飛び立ったのだ。乗組員は短期研究の地学、生物、海洋分野の科学者、芸術プログラムの参加者、スタッフ、そして、基地入域の陸空の軍人である。

2015 芸術プログラムの参加者と専門は以下であった。Betiana (アルゼンチン) 映像と写真, Erica (アルゼンチン) 映像, Mariana & Guadalupe (アルゼンチン) 映像, Esther (オランダ) 写真, Natalia (コロンビア) 映像とインスタレーション, そして私の6グループ7人である。同行のLinaはこの芸術プログラムにおける南極滞在中の責任者, Adrianaは南極局の教育のキュレーター, 最後に西英の通訳者Yaninaである。(全て女性) 滞在中は一ヶ月。彼女達と生活を共にしながら南極で活動するのだ。

トイレも食事もなしで2,000 km, 輸送機は5時間もかかってリオ・ガジェゴス空軍基地に到着し、宿舎に着いたのは日付が変わる前だった。マランビオ基地へのフライトは明日になったので、軍の宿舎で一泊することになった。昼12時に集合してから、12時間、宿舎でやっとビスケットとオレンジジュースが出る。誰も何も言わずこのメニューで楽しく過ごす。凄いパワーである。外国隊で南極へ行くということはこういうことなのだと洗礼を受けた。

1月4日、マランビオ基地へは9時出発と連絡され、皆寝袋をたたんでザックに詰め

て、トラックに載せ、荷物だけが一旦飛行場へ向かった。2時間後、トラックは戻ってきた。待機だという。しかし何時になってもトラックは飛行場へ移動しない。やっぱり今日は飛ばない。欠航。パタゴニアの強風とドレーク海峡の天候不良が原因だった。我々は再び荷をと、ここでもう一泊した。

1月5日、天候不順の知らせに誰もが、もう一日ここで足止めだと思っていたので、皆のドミトリーは散乱していた。そこにいきなり出発が告げられた。飛ぶチャンスは今しかないと言う。「大きい荷だけでも早く運び出せ。」と軍人が叫ぶ。その時納得したが、軍下に入ると常にこの突然命令が当たり前なのである。

アルゼンチンの南極マランビオ基地は南緯64度14分、西経56度38分にあり、長さ14キロ、幅8キロの露岩の島にある。南極のアルゼンチン13基地(内六つが恒久基地)の中でもエスペランサと並ぶ大基地で離着陸に有利な平坦な地形を利用したハブ基地である。マランビオまでは約1200キロ。離陸して途端、急速に機内が冷えはじめ、皆一斉にダウンを着込む。輸送機なのでエアコンデションは無い。この寒さで、一層南極に接近したと感じた。夕刻、雪のマランビオ基地へ到着した。ここでもまた、エスペランサ基地への移動命令が二転三転、結局天候不良で、明日へ延期になった。

マランビオ基地では軍の基地滞在中の注意事項をビデオで研修、各専門家の話があった。1月6日、昨日よりマランビオ基地内の軍人の人数は増えていた。ここで我々と同様に天候の回復を待ちながら、各基地へ飛ぶのだ。そして、いよいよ、18時出発と命令が下り、5人乗りの雪上機はエスペランサへ向け飛び立った。距離は約90 km。高い小窓の輸送機では見ることの出



来なかった南極海の海水が眼下に広がっていた。一つ一つの白い氷のかげらが、モザイクタイルのようにキラキラと輝いて美しかった。ああ、私は今南極半島の上空にいるのだ。陸地が近づくと分厚い氷上で生まれた鉛色の雲が現れ、海にせり出した巨大な氷河が目の前に迫ってきた。この氷河の上に降りるのか。機が旋回する。「あっ！」雪と露岩の間に小さなオレンジ色の屋根が見えてきた。エスペランサ基地だ！私はここで大自然に試されるのだ、と思った。基地の上空を通り越し、雪上機は背後にある広大な氷河の上に雪煙を上げながら着陸した。

雪上車が迎えに来ていた。タラップを降りると鉛色の冷たい風が私の体を通り過ぎた。私はその瞬間に思った。「ここでの活動は命がけだ！」我々は雪上車で、ゆっくりと氷河を下り、南極海のホープ湾にある基地へと移動した。

芸術プログラムの参加者は予め極地での活動内容について詳細に提出させられている。何処で、何をやりたいのか。その為に何が必要か。重機、人員、時間、時期等、極地ならではの周到な準備が必要だからだ。それを現地でアレンジし、軍の協力を得て要請、プロデュースするのが、同行のキュレーター（学芸員）である。



写真 3. エスペランサ基地上陸

しかし、驚いたことに、基地での予程は全く無い！誰に聞いても「知らない」という。不思議に思ったが、数日後の「ブリザード三日間外出禁止令」でその理由がすぐ分かった。南極半島の突端にあるエスペランサ基地は常に北西から南東に、つまり陸から海に向けて強風が吹いており、天候が急変する。また夏期、その風が弱まる時は南極大陸のロンネ棚氷から離れた海水がウエッデル海から南極海峡へ流れる風によって崩壊しながら一夜にして漂着する場所であった。

私たちはこの天候の中で、ほとんど毎日、明日の日程を前日に告げられる生活を送った。その中で、私達はまず、天候の良い日を見計らって基地の視察と野外活動に十分時間を費やした。1月7日、南極海に停泊しているノルウェーのクルーズ船FRAM号の見学、1月8日、基地、発電棟、気象棟、学校棟、図書館棟、博物館棟、教会棟視察。1月9日、基地内集会所にて南極局製作のビデオ研修、1月10日～11日ミーティングや現場活動の準備、野外活動。1月12日、この日はタンクに水が来る日で、女性陣はシャワーを期待した（一時、お湯になったがすぐに止まった。）。1月13日、通信棟視察。一週間が過ぎ、それぞれのアーティストが、自分の取材活動に出かける機を模索し始めた。Lina（ボス）から言われた決まりは、必ず二人一組で出かけること、行き先を告げること。基地内徒歩範囲はわずか150メートル程なのになだ。そしてペンギンには5メートル以上近づかないこと。基地の様子もほぼ把握した私達がペアで取材に出かけようとした次の日から天候が一変した。三日間激しいブリザードが吹き荒れたのだ。このブリザードは私達に初めて南極大陸の厳しさを見せつけた。

外出禁止令と言っても、一日2回、昼食

と夕食を集会所へ取りに行かなくてはならない。これがチャンスだ。風が静まるのを見計らって懐にカメラを忍ばせ短時間で自然の驚異を収めた。私はその嵐の中で一羽、風上に向かって羽を広げていたペンギンを見つけた。何と生物の逞しいことだろう。その時の感動を作品「ブリザードの日に」に描いた。

基地での視察はブリザードが去ってからも続いた。1月18日、生物学者引率によるペンギンのコロニーへの観察。1月21日焼

却棟視察、発電棟視察。1月23日、ボートで海洋学者の南極海の水質調査に同行。1月24日、軍のレスキューのビデオ研修。ブエノスアイレスへの帰還が1週間後に迫っていたこの日、遂に私の本番が明後日26日と告げられる。しかし、天候が悪化したら無理だと言う。

#### 南極の大地の上で

私は気持ちを26日に合わせた。養生用に基地で集めたナイロン袋で巨大な下敷き



写真 4. 作品「ブリザードの日に」

を作った。墨はマイナス6度でシャーベット状になる事は、冬の八ヶ岳山麓でテストしていたので、タンクは布で幾重にも巻いた。筆は長い筆管をのこぎりで半分にし、使用する時は中に細い竹を捻じ込んで刀のように準備した。

1月26日、朝5時半起床、皆まだ寝静まっている中で着物を着付ける。10時、天候は快晴微風。アーティストと学芸員、全員が雪上車とスノーモービルに分乗して基地背後に仰ぎ見る広大な氷河へ移動した。

南極の雪氷上でのパフォーマンスは私だけだった。全員が準備を手伝ってくれる。

最初のインスタレーションは「サークル」である。用意した棒を雪原に差し、そのポールを極点とし地球の稜線をコンパスの様に刻みつける。足を筆として草履で雪を削り大きな円環を描く。全ての風はここに集まるというインスタレーションだ。突然吹雪になり前が見えなくなるが、不思議だ。寒くない。白くて冷たい氷の結晶になった

感覚であった。そして、海からの風が雲を飛ばすと青い空が現れた。雪原に養生用のナイロンを引く。その上に10メートルの白布をのせ、風にあおられながら、手分けして石で押さえてゆく。そして精神を整えゆっくりと揮毫を始める。「風道開」。南極大陸に「表現の分野」という新しい風を吹き込む意義と願いを込めたインスタレーション。全ては礼に始まり礼に終わる。

1月29日、プログラムは無事終了し基地を離れる。エスペランサ基地で、同地を離れる3日前にこのパフォーマンスが出来たことは本当に奇跡だった。私達は帰路、ロシアの砕氷船で4日間南極海を航行し、またしてもヘラクレスのお腹に詰め込まれてブエノスアイレスに帰還した。

(\*インスタレーションとは、場所や空間全体も作品とし(また一部として)構成される現代アートのジャンル。作品が特定な場所と密接に結びついているが、恒久的作品でない為、写真や映像等の記録で残す方法



写真 5. 世田谷美術館「南極の風」

をとる。)

### 帰国して

私は南極でのインスタレーションに加え、帰国後作品を創作し、2015年9月、「南極の風」と題して世田谷美術館で無事に展覧会開催。会場には在日アルゼンチン公使をはじめ長年応援をいただいた岩野祥子氏、本吉洋一先生、菅原茂氏、そして、冒険家を支援し続けてきた地平線会議の江本嘉伸氏も駆けつけてくださった。

名もない一人の作家が南極へ外国隊の一員として訪れ、そこで貴重な体験させてもらったことをどう伝えたらよいか。本吉先生から「極地」への寄稿の機会を頂き、日本極地研究振興会の吉田栄夫先生からも改めてお手紙を頂戴した。少し戸惑ったが、年月の経過に添って思うままに書かせて頂いた。日本の南極での貢献は現在観測研究と

科学の分野が占めている。私が実際南極で感じた事は、南極に科学的価値があるなら、芸術的価値も同様にあるということだ。あえて隔絶された場所へ行き、感性のアンテナを張り巡らせる時、五感で捉える自然との対話が生まれるからだ。

この地に表現者が降り立ったら、どんなメロディの音楽ができるであろう。どんな美しい詩が出来るであろう。どんな感動的な作品が生まれるのであろう。

いつか日本でも南極における「芸術プログラム」が生まれることを期待したい。

辺境の旅は常に忍耐と粘り強さが要求されるが、実は我々はささやかに生かされているだけなのである。

地球を旅して『風書』で描く。驚異の自然に対して常に謙虚でありながら、これからも自分に出来る仕事で伝えてゆきたいと思う。